特選
2019
文部科学
大臣賞

第52回「おかねの作文」コンクール

目を向けるべきは「お金の本質」

滋賀県・滋賀大学教育学部附属中学校　２年　道脇　彩乃

お金とは何なのだろう。一見するとただの紙切れと金属の塊でしかない。しかし、今の社会を動かしている重要な鍵を握っている。為替相場が日々変わるように通貨間の相対的な価値は流動的で不安定だが、その通貨を用いている国内においては、誰にとっても絶対的な存在感とほぼ一様の価値を共有している。「そんなの当たり前じゃないか」と言われるかもしれないが、よく考えてみると、世の中の「モノ」の中で、お金ほど不思議な性質を持つものはないことに気付かされる。

例えば、ある美術作品があったとする。その作品が好きな人にとってはすごい価値があったとしても、興味のない人にとっては全く価値がないどころか、ただのゴミかもしれない。これは、食べ物や衣服その他、世の中のありとあらゆるものに当てはまることだと思う。しかし、お金はどうだろう。お金が好きとか汚いとか、お金に対する感情は様々でも、例えば100円と言えば、誰でも「○○が買えるな」とか「パン1個かあ」などと、100円が持つ価値を一瞬で共有できる。こんな不思議なものが他にあるだろうか。お金って、本当に不可思議で捉えどころがなくて、でも大切なもの。そう言えるのではないだろうか。

では、お金に価値を与えているものとは何だろう。それは「人々の絶対的な信頼」ではないだろうかと私は思う。為替相場が日々変わるのも、新商品の値段が決まるのも、大恐慌やリーマンショックでお金の価値が暴落したのも、その時その瞬間における人々の信頼に動かされた結果だと考えるとつじつまが合うように思う。「人々の価値観の総意」だからこそ、実体はあっても実態はない。そんな二面性を持つものがお金ではないだろうか。

信頼がお金に価値を与えるのだとしたら、逆に信頼がなくなったらどうなるのだろう。今の貨幣は皆、紙くずや金属の塊になり、貨幣に使われている原料の価値以外残らないのではないだろうか。太古にお金として使われた貝殻が、

© 金融広報中央委員会 2019

現在では考古学的な価値以外ないのと同じように。そう考えると、実体がある貨幣でさえ、忘れ去られ、信頼という価値が失われると、貨幣がまとっていた魔法はとけてしまう。だとしたら、今私たちがお金に対して抱いている様々な感情も含め、確かなものなど何もないのかもしれない。

日本版金融ビッグバン以来、投資信託や株取引などを個人で簡単に行えるようになった。例えばＦＸ取引では資金の100倍以上のお金が運用できるし、投資信託でもファンド独自の計算方法により、同様のからくりが行われているものもある。その結果、世界各国が実際に保有している貨幣の総量よりはるかに多額のお金が流通し運用されている。今現在私たちが「ある」と信じて流通させ運用しているお金でさえ、その実体（実際の貨幣保有量）とはリンクしていない。それが今のお金の実状であるが、この事実をどれだけの人が意識しているだろうか。

たとえ不透明で曖昧な面を持ち合わせていたとしても、お金が経済の土台である以上、お金と私たちの生活を切り離すことはできない。切り離せないからこそ、お金の信頼性をいかに強固に保っていくかが大切なのだと思う。

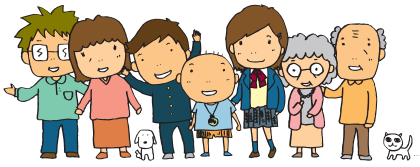
インターネットが普及し、世界中の人たちとリアルタイムでつながることができるようになったことで、世界は狭くなった。利便性が向上し、仮想マネーが発明され流通することで、世界中の人たちが共通のマネーでつながれ、お金の流動性は格段に増した。今、世界でキャッシュレス化が進んでいる。今まで保ってきた「実体」そのものをお金が失い、お金は私たちの手から離れ、実体のない仮想の世界へ飲み込まれようとしている。これは、お金が発明されて以来の大変革だと私は思う。それと同時に、今後お金の持つ不透明さや曖昧さは増すことはあっても減ることはないのではないか。そう思わずにはいられない。

最初は物々交換の仲介手段として誕生したお金も、世の中の発展に従ってその姿を変え、役割や範囲を広げてきた。そして今、実体さえ失(な)くそうとしているお金にどう向き合うのか。どう付き合うのか。お金が信頼により存続しているのなら、その信頼を守るために私たち一人ひとりが何に注意し、目を光らせていなければいけないのか。

お金といえば、投資の方法等の「いかに自分の資産を増やすか」という面にとかく注目が集まりがちだが、その資産でさえ、お金の信頼の上に成り立って

© 金融広報中央委員会 2019

いるものだということに、もっと目を向けていいのではないだろうか。お金をお金として、その価値と存在をずっと保ち続けるための、「お金に対する教育」について真剣に考える時が来ているのではないかと私は思う。



© 金融広報中央委員会 2019